
「"ペン", "豚", "薔薇"」

蒼月光華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三題話「ペン」「豚」「薔薇」

【Nコード】

N8640L

【作者名】

蒼月光華

【あらすじ】

主人公僕の恋物語。

薔薇の棘とか、嫉妬とか、愛の形。

（前書き）

自己満足。

綺麗な恋愛を描こうとして、失敗したらこんな風に。
でも、これはこれで真っ赤で綺麗。

僕がこの学園を選んだのはとても簡単な理由だ。
校舎裏の庭園の奥で君臨していた、薔薇の園に惹かれたからだ。
ただそれだけなのだ。

面接試験を経て、僕はこの学園の生徒になった。
調べたら、庭園の管理は事務員と生徒会の一部で行っているらしい。
僕は仕入れた情報について考えながら、問題を解く。
入学早々の実力判断模試は、多くの悲鳴を呼んだ。
進学校らしさはこういった細部に出てくるらしい。
しかし流石に生徒も馬鹿ではない。
ここに来る程度のレベルではある。
一応、県内最高峰程度ではあるのだ。

カツカツとペンの音。
ギシギシと消しゴムのせいで揺れる机の音。
隣の席の奴のすうすうという寝息。
既に解き終えた問題から空に視線をずらす。

これは、どこにでもあるの学生生活のカタチのひとつ。

生徒会にバラ園の世話をしたいと告げた時、帰ってきたのは簡単な言葉だった。

「え、あれってうちの管轄なの？物好きがやるもんだと思ってたけど？」

なんてことはない。

本当に生徒会の「一部」が好きにやっていただけなのだった。

この学園の薔薇は四季咲きで、年中咲く。

ゆえにずっと管理をしてやらねばならない。

結果、やりたがる人間は少ないのだ。

先生に許可を貰い、僕は庭園の管理を始めることにした。

だがそこで見たのは薔薇ではなかった。

決して薔薇が咲いていなかったわけでは無いし、植え替えられていたわけでもない。

その日僕が見たのは

薔薇に囲まれて安らかな笑顔で眠る、女性だった。

思わず息を潜めるほど、幸せそうな寝顔。

透き通るような白い肌は、春の日差しでうつすらと輝いてすら見える。

優しい風が吹き、庭園に花びらが舞った。

風とともに彼女が目覚まして…

「あら？」

それが、出会い。

「なるほど、ここの管理…特に薔薇の管理がしたい。

だからここにきたら私が寝ていた、と」

そうです、と返した僕に年上の彼女は

「じゃ、一緒にやろうか」

と花が咲くように、笑いかけてくれた。

放課後も、土日も、長期休暇も何もかも。

僕たちは庭園の管理に追われた。

最初は先輩である彼女に学びながら。

途中からは彼女と一緒に学びながら、新しいものを植えたりもした。勉強を教えて貰ったことも、デートをしたことも、なにもかも。

普通の恋人同士に、僕らはなっていた。

やはりその笑顔は花が咲くように可愛らしく、美しい。

手を伸ばすのを躊躇うほどに…綺麗だ。

「ねえ、なんでずっと顔を見てるの？」

はっとして、なんでもないですという。

今までは、それで許してくれた。

今日は、そのまま唇を奪われた。

驚いた顔の僕に、彼女は不安げな顔で嫌だった？と聞く。

全力で否定する僕は少し滑稽で、楽しそうに笑う彼女はやはり美しかった。

ガッという音がした。

ちょうど彼女の教室のある階を通った時に、それに出会った。

僕の同級生の子と、彼女の同級生の子が彼女を囲んで蹴っていた。

ギツとかゲエとか。

果てには涙も鼻水も垂れ流して。

彼女は蹴られていて。

僕は、逃げた。

豚のように這いずる彼女の目はしっかり僕を映していた。

僕は伸ばされた手から逃げた。

二日後、庭園に彼女は来た。

ヨタヨタと、松葉杖について、包帯だらけの腕と顔と足とでも、何も無かった。

彼女は僕に何も言わなかった。

やった同級生は理事長の娘とやらで。なにも、無かったのだ。

あったことは一つだけ。

彼女を蹴り汚した奴らが僕を囲んだ。

「あんな豚みたいなのより、私と付き合いなさい」
理解、出来た。

つまりこの子は恵まれて育ってしまった。

歪みながら、しかしそれを許容されながら、育ちきってしまった。それだけの、女の子。

ごめん無理、という僕に反応したのは左右のセンパイ様方。

オイオイそれはないだろうよ、と殴られた。

そして僕と同級生の子は、泣き出した。

なんてことはないのだ。

ぼくはただ

「あの日、僕の目に映ったのは、君の目に映っている僕だ」

そう、告げたのみ。

何も無い。

そこには何も無いのだ。

あこがれた姿も、恋した笑顔も。

苦痛に歪んだ、醜い顔。

汚らわしいとすら、思えてしまうほどに。

何も、無いのだ。

少しずつ、彼女の包帯は減った。

松葉杖は無くなった。

でも、包帯は少し残っていて。

痣は痛々しく。

ついに、声を上げた。

「もう、もういいですから！僕が、助けなかったことは！」
謝ろうと、僕は声をあげて。

「黙りなさい」

黙らされた。

う、と詰まる僕にヨタヨタと、彼女は近づいてきて。

僕の胸倉をつかみ、大声で

「謝らせないわ。だって謝らせたら」

そこで一息つき、逆に小さな声で囁くように

「あなた、私から離れるでしょう？」

妖艶に、咲き誇る、君臨する薔薇達のように

「これは、鎖」

艶やかな笑顔で

「逃がさないわ」

「この痛み」

「この苦しみ」

「あなたの罪」

「すべて、この身に閉じ込めておくの」

引き込まれるように黙った僕に、彼女は口付けをして

「あなたを、愛しているわ」

その言葉はペンのように、どこにもある、誰にでもある「愛」の鋭さを含み

その言葉は薔薇のように、棘を含んだまま僕に絡みつき刺さって離れず

その言葉は豚のように、薄汚いイメージの姿で

汚らしい程の狡さで僕を縛り付けた。

この身は、彼女という棘だらけの薔薇に魅了され、絡みつかれた。血塗れの赤い、そして少し黒いような。

どこにでもある穢れた花に。

彼女は薔薇の園に咲き誇る、その笑顔を僕に向ける。

「逃がさない」

もう逃げません、と答えつつもりだが、息が詰まっている。

「許さない」

永遠に償います、そう言いたかった。

「あなたを愛しているのよ」

「あなたを愛しています」

ただ一言だけ、僕の口からこぼれた。

これは、どこにでもあるレンアイの一つのカタチ。

彼女が僕に刻んだ傷は、癒えない。

僕が彼女に残した傷は、癒えない。

ならばこれはレンアイなのだろう。

少なくとも、お互いを求めて傷つけあって傷ついているのだから。

これは、一つのレンアイの形なのだろう。

冬を告げる風が、薔薇の花びらを巻き上げた。

僕たちは、誓いの口づけをした。

さわさわと、風に揺られる薔薇が、妖艶に笑っている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8640/>

三題話「『ペン』、『豚』、『薔薇』」

2010年10月28日04時55分発行